第624号
喬木村公民館：長野県下伊那郡喬木村6664

発行日　2021年３月16日
発行責任者　喬木村公民館長　市瀬　徹
編集責任者　公民館編集部長　仲田久志
印　　刷　龍共印刷株式会社

文化サークルの活動

公民館のサークル紹介

今年に入って急上昇した新型コロナウイルスの警戒レベルも下がり、福祉センターなどの施設がほぼ従前どおり使えるようになりました。（小中学校の施設は制限有）今月は、福祉センターで活動している編み物教室、七宝焼教室にお邪魔しました。どちらも教室を再開したばかりでしたが、部屋中賑やかで、楽しそうに作品作りに打ち込んでいました。

編み物教室

毎週木曜日に福祉センターで開かれる編み物教室は、北の三石加代子さんが講師となって活動しています。会員に二月から活動再開した感想を聞くと、「みんなに会えなくてさみしかった。ここに来ればわからないところを先生に聞ける。」「やはり、福祉センターに集まらないと。集まってみんなで話をすることが楽しみ。」「花が咲きだし、手も口も上手に動いて楽しくできました。」と楽しそうに話していただきました。

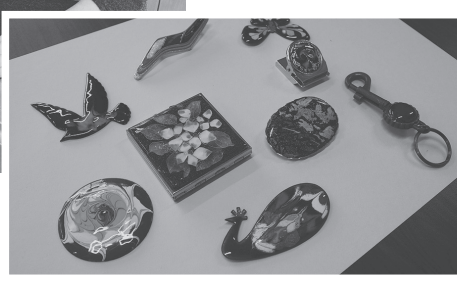
教室の再開に賑わう会員の皆さん

七宝焼教室

毎週土曜日に福祉センターで開かれる七宝焼教室は、南の賜洋子さんが講師を務め、こちらも二月から活動を再開しました。たくさんある見本の中から好きな技法を選び、好きな作品を作ります。材料は高価なものもあり、費用も掛かりますが、毎回焼いてみないとどんな色に仕上がるかわからない、同じものは二度と作れないところが魅力だそうです。会員にお話を聞くと、「自粛期間中は次の作品の構想と夢を膨らませていた。再開を待っていた。」、「その日に作ったものを帰りには身に着けられるのですごく嬉しい。」と話されました。

昨年は、コロナ禍でもたくさんの作品を総合文化祭に出品されました。どちらも教室の再開を喜び、休んでいた分を取り戻すような勢いで作品作りに集中していました。

各工程のコツを先生から教えていただきます


見本にする賜先生の作品

阿島傘講と秋葉様

文化財保護委員　市瀬武文

毎年、十二月十六日に秋葉山本宮秋葉神社で例大祭が行われます。①

阿島傘講の「参詣記」によりますと文久二年、（一八六二）より秋葉神社へ行き始め、今日まで百五十八回代参してきたと記されています。

江戸時代末期の傘製造者は阿島を中心として、百四軒ほどありましたので、その関係者で講をつくり、旅費等を出し合い交替で代参してきたそうです。

現在は四年に一回順番が回ってきますので、数人で出席しています。

昔、車のない時代は、山道（秋葉みち）を歩き小川路峠を越えて上村～水窪～秋葉山へ向かったと思われます。その後、国鉄飯田線を利用するようになり、今は車で行きます。

代参で持参するものは、阿島傘（②）、明治四年に初めて二本奉納し、その後生産発展と共に三本・四本と増加し、明治四十年には十本となり、現在は貴重品につき五本となりました。他に奉納金・奉納帳を持参します。

代参当日は、秋葉神社へ到着後、社務所に奉納品を納め、お札を戴く。その後、本殿にて御祈祷を受けます。

例大祭は、午後一時半より本殿で行われます。

大太鼓の音から厳かに神事が始まり、祈祷・開扉・供物奉納（十三種類位）・祝詞・雅楽の調べ・巫女の舞・稚児の舞等あり、玉串奉奠はそれぞれの名誉職の方々の後、全国秋葉講の順番となり、最初に阿島傘講が呼ばれ玉串奉奠をしてきました。直会の後は、夜十時より、本殿で防火祭（ヒノセンマツリ）が行われます。それに先立ち、迫力ある手筒花火の奉納がその後、神楽殿において秘伝の弓の舞（③）、剣の舞があり、最後に火の舞（④）で、防火祭・例大祭は終了となります。

村内各地に秋葉様に関する石碑があります。それぞれの地域にどのような講があったのか歴史を調べるのも面白いと思います。

秋葉神社に代参する講の皆さん

注

①令和二年度はコロナ禍で奉仕者のみで斎行

②傘に秋葉神社・阿島傘講と記入

③天井に矢を放ち、当たり方で豊年吉凶を占う

④本殿の御神燈より松明に火を移し神楽殿でご神火を上下左右に振りかざし、諸厄諸病を祓う

参考文献
「参詣記」阿島傘講
「阿島傘」喬木村教育委員会
「喬木村誌」長野県下伊那郡

喬木村公民館体育部員募集のお知らせ

喬木村公民館では、分館対抗球技大会や駅伝大会など、公民館体育事業を担っていただける方を募集しています。年齢・性別問いません。一緒に楽しく体育事業を運営しませんか。

○内容

・会議の出席（夜間）年七回程度

・分館対抗球大会（年四回）。駅伝大会など公民館体育事業の企画および運営

○会議、活動に出席報酬が支払われます。

※支払い時に所得税が控除されます。

○任期

・一期二年（再任も可能です）

お問い合わせ：喬木村公民館　三三―三六八四

あの時この時

三月十一日で東日本大震災から十年となった。死者、行方不明者は一万八千人余り、災害関連死者を含めると、二万二千人もの犠牲者を出した大災害から十年が経った。しかし、復興は遥かに遠い。巨大津波によって引き起こされた福島第一原発事故で故郷を追われ、避難生活を続けざるを得ない人は、まだ四万人以上いるという。

宮城県石巻には巨大な防潮堤が築かれた。住民は高台に住居を移転し、海の見える故郷の景観を守ろうとしたが叶わなかった。「災害復旧工事として、海沿いの幹線道路を高台に移すことはできない」という国の方針に従わざるを得なかったのだと聞く。まるで刑務所のように、巨大防潮堤で囲われて海が見えなくなった故郷に絶望し、故郷を捨てる人が増えているという。

先が見えない原発事故の後処理も大きな課題だ。放射能を含む処理水は増える一方で、海に放出することになるかもしれない。帰宅困難区域内は荒れ放題で、今後除染が進んでも住民が戻ってくることは極めて難しいと思う。

東日本大震災によって、原発事故の恐ろしさを思い知らされた私たちは、どうすればいいのだろうか。今、脱炭素（ゼロカーボン）をめざすために、原発を活用しようとする動きがある。注視していきたい。（館長）

シリーズ

むかしの公民館報

第二五六号　平成元年十一月三十日発行

記念の一年しめくくり

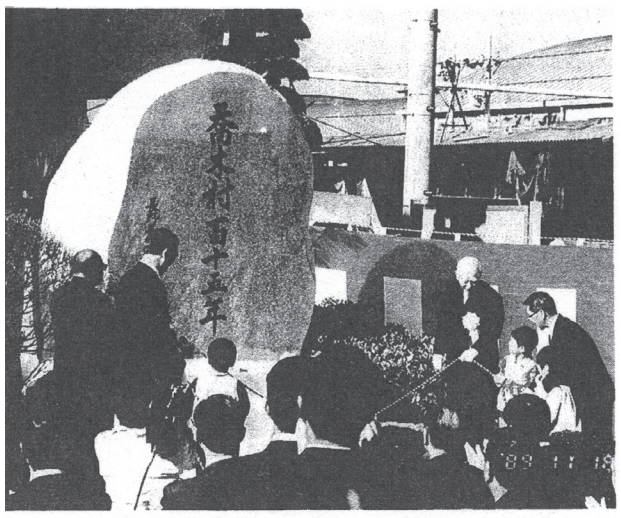
発足115年 記念式典開く

石碑を建立

村木〝イチョウ〟も決まる

村発足百十五年、村制施行百周年を迎えた喬木村は、十一月十八、十九日の両日記念式典など記念行事を行い、節目の年の最後をしめくくった。十八日は午前九時より総合表彰式、引き続いて記念講演、講師は桃添出身でスポーツニッポン東京本社社長牧内節男氏で、「私の新聞人生」と題して四十年間にわたる記者生活の体験を話された。午後から役場庁舎前で、来賓多数出席のもと「百十五年記念碑」の除幕式を行った。この後中央社会体育館で記念式典が挙行された。

喬木村は明治八年一月、小川、富田、加々須、阿島、伊久間の五ケ村が合併して誕生した。村名は中国の詩経より命名された。その後旧村時代からの問題等色々あり、分村問題もあったが明治二十六年決着以来、明治、大正、昭和、平成の時代を経て来た。百十五年の記念事業は、ふるさと創生事業とセットで、春の桜まつりに始まり、女子バレーボール、ソフトボール招待試合、夏には阿島橋ふるさと祭り、ジャンボ傘づくり、寄席、ミュージカル公演、ふるさとシンポジウム、記念誌とビデオの制作、喬木音頭、喬木小唄の制作、村木の制定など数多くの記念事業が行われた。そして最後の行事、記念式典と合わせて総合文化祭が催された。村民が一丸となって取り組んで来た各種記念事業も終った。村発足百十五年の歴史の重みを踏み台に、二十一世紀へ向って、活力ある村づくりに村民一人一人が英知を出し、誰からも愛される村、いつまでも住んでみたい村めざして、大いに飛躍しよう。



石碑の除幕式（役場前）

記念式典

・村木にイチョウ制定

村木にイチョウを制定した。イチョウは小中学校の校章でもあり、みんなから親しまれている。生長すると喬木（きょうぼく）になる、村名は中国の詩経からの由来、イチョウも中国の木などが理由、村は研究委員会で研究したほか、村民から公募するなどして考えを聞いた結果、やはりイチョウを村木にという声が多く、議会全員協議会にはかり決定した。

公民館教養部 読み聞かせについての紹介

喬木村公民館教養部では、小学校の春休みと夏休みにあわせ、様々な本の読み聞かせの収録を行い、くりんネットにて放送しています。読み聞かせる本は一回読み切りで、読む本は各部員が選んでいます。

この度、読み聞かせを行っている七名の教養部員の方々がどのようなことを考えながら読み聞かせをしているのかを、お聞きしましたので紹介します。

川口　範子さん

小学生になった子どもたちが、学校から親子二十分間読書カードを持ち帰り、毎晩寝る前に一人、一冊ずつ読んでいました。その子どもも親となり、子どもに本を読み聞かせています。子どもさんだけでなく、大人の方々も聞いてくださっていることを知り、皆さんが聞きやすいよう、ゆっくり、はっきりを心がけて読んでいます。

松澤　弘美さん

今はそれぞれ独立した三人の子どもたちが小さかった頃は、よく読み聞かせをしておりました。読んでいる自分の方が感情移入して、夢中になった本も多々あります。私自身も昔話などが大好きで、聞いてくださっている皆さんにも情景がわかって頂けたらと思いながら、楽しく読ませて頂いています。

中野　あかねさん

もうすぐ三歳になる孫に読み聞かせるように、わかりやすく、その場面が頭に浮かぶように読めれば良いなと思っています。

佐藤　富貴子さん

幼い頃、眠る前に母が必ず読み聞かせをしてくれました。そうすると、いつも安心して眠ることができ、良い思い出になっています。私もまた、我が子達に読んで聞かせてきました。息子達が成長した今、読み聞かせの機会をいただき、とにかく聞いてくださる方が、楽しんでホッとできるよう、心を込めて読ませていただいています。

佐藤　美恵子さん

春休み、夏休みの年二回読み聞かせをさせていただいております。聞いていただいた方から、「毎回聞いているよ」、「良い物語だったよ」など、お声をかけてもらい、嬉しく思っております。これからも、季節にあったお話を選んで、皆様に心地よい時間を過ごしていただけるよう心がけ、読んでいきたいと思います。

下岡　悟子さん

読み聞かせの本を選ぶ時は、毎回図書館に行き、一時間くらいかけて悩みながら選んでいます。春休みや夏休みのお話の時間が、聞いてくださっている皆さまにとって、ほっと一息つける心和む時間になってくだされば嬉しく思います。

伊藤　純子さん

本を選ぶのがとても大変ですが、とっても楽しいです。自分が子どものころ好きだった本、娘に何度も読んだ本など、いろいろな事を思い出しながら楽しく選んでいます。

今年の春休みの読み聞かせは、三月十八日～四月五日の十九日間、午後六時三十分からです。ぜひ聞いてみてください。

読み聞かせ収録時の様子

編集後記

コロナ禍になり約一年が過ぎた。いろいろあったがまだ気をゆるめるわけにはいかない。ワクチンが少しずつ広がり、もう少し我慢の日が続くだろう。公民館活動も出来なくなり、館報を発行するのに毎回苦労している。そんな中、昔の館報を見ていると興味深い記事がある。昔は他に広報誌がなく、村内の出来事や村政のことなど広く公民館報にのせていた。その時何がおこっていたのか、いろいろわかっておもしろい。今、この時の事をのせていこと、未来へ伝える館報を作っている。

喬木短歌会 如月歌会詠草

亡夫（つま）と吾常に好みし料理提げ
若さらは来て鍋を囲みぬ　小椋　りよ

夫の声何事かとて疾く行けば
福寿草咲きぬ大寒の朝　田中　妙子

コロナ禍に驕りの議員ら頭（ず）を下げる
小学生のスミマセンのごと　市瀬　准子

退院の主治医の指示のうれしかり
不安のよぎる身近なコロナ　知久　美子

歌謡曲を好みゐし兄穏やかに
卒寿を過ぎて遂に身罷る　木林　睦枝

神々に祈り虚しく広がりて
変異までもが恐るべしコロナ　内山　貴子

通院日バッタリ逢いし弟の
優しき笑顔亡父（ちち）に似て来し　木下　寿子

夕方の家事に追はれて口惜（くちお）しや
今年初なる満月見逃す　元島　康子

如月の雨に目覚めし福寿草
コロナ禍の日々に灯火（ともしび）のごと　内山　和子

「おはよう」と言えば微笑み返すのみ
言葉続かぬ哀しき女（ひと）あり　関島　春子

迷ひ箸窘（たしな）められしは幾たびぞ
座り胼胝（たこ）ありし祖母遥かなり　福澤　亀人